

東日本大震災・新型コロナウイルス感染症拡大が障害者の就業・生活に与えた影響についての分析

○堀 宏隆（障害者職業総合センター 上席研究員）

野口 洋平（元障害者職業総合センター）

稻田 祐子・武澤 友広・田川 史朗（障害者職業総合センター）

1 問題の所在と目的

障害者職業総合センターで実施した「障害のある労働者の職業サイクルに関する調査研究」は、2008年度から2023年度までの16年間、2年ごとの8期にわたって多様な障害者（調査開始時点で週20時間以上就労している者）を対象に実施したパネル調査である。

同調査研究では、2011年3月の東日本大震災や2020年以降の新型コロナウイルス感染症拡大がもたらした社会情勢の変化が、障害者の就業及び生活にどのような影響を与えたか、自由記述で回答するよう求めた。

本発表では、その回答内容を分析し、影響の質的側面を中心に明らかにすることを目的とした。

2 方法

（1）質問項目

東日本大震災による影響については、第3期調査（2012～2013年度実施）、新型コロナウイルス感染症拡大による影響については、第7期後期及び第8期前期調査（2021～2022年度実施）により、それぞれ、以下のとおり質問を追加して調査を行った。

「平成23年3月11日の東日本大震災について伺います。あなたご自身の体験やご家族や仕事先で起きたこと、またそれらの体験の中で特に困っていることなどありましたら（回答枠）の中に自由に記入して下さい。」

「新型コロナウイルス感染症への対応により、あなたの仕事や日々の暮らしに変化はありましたか。変化があったと回答された方は、具体的な内容を（回答枠）の中に自由に記入して下さい。」

（2）分析方法

回答を内容の類似性により分類し、具体的な内容の詳細や特徴等を踏まえ、それぞれどのような影響を与えたのかを概略的に明らかにした。

3 結果

（1）東日本大震災の影響について

本設問には246人（震災の発生から1年超が経過した2012年度に実施した調査では140人、2年超が経過した2013年度に実施した調査では106人）の回答があった。回答を分類した結果、「生命、家族、職場等への被害」「避

難」「安否確認」「職場待機・帰宅困難」「ライフラインの寸断」「サプライチェーンの停滞」「障害特性による困りごと」「仕事量の減少・離職」「仕事量の増加」「不安・悲しみ等の感情の出現」「人生観・価値観の表出」「防災に関すること」「ボランティア・募金等の被災地支援」「原発に関すること」「特に影響はなかった」に分類された。以下、分類別に自由記述の例を示す。

「生命、家族、職場等への被害」：大きな揺れに見舞われて恐怖だった上に、実家も被害に遭い、親戚を数人亡くした。今後、自分の住む地域で大きな地震が起きた場合の様々な不安を抱えている（視覚障害、34歳）。

「避難」：避難の誘導、聞えなかった。当時、けいたい電話、緊急警報（津波、地震）搭載されてなかった。情報がわかりにくかった。計画停電の時、作業になるとき、上司の人と携帯メールで連絡した（聴覚障害、37歳）。

「安否確認」：かぞくにれんらくがつかなかったことしょくばの人からかぞくにれんらくしてほしかった（知的障害、33歳）。

「職場待機・帰宅困難」：帰宅困難者となり、会社に泊まった。友人達から連絡はもらうが、回線がパンクして、連絡をとる手段が会社のPCしかなかった。会社で毛布が配られたので、自分の机の中にもぐって休んだ（視覚障害、36歳）。

「ライフラインの寸断」：震災後何週間かライフラインが止まってしまったこと。水を確保することが困難であったこと（視覚障害、52歳）。

「サプライチェーンの停滞」：製品の部品供給がわるくなり、操業が停止し、休業が続いた。給料が下がり、生活に困ってた（聴覚障害、39歳）。

「障害特性による困りごと」：透析は水や電気のライフラインが重要ですが計画停電や断水等により、2、3ヶ月、関東でも透析が十分にできないことがありました（内部障害、55歳）。

「仕事量の減少・離職」：つとめていたお弁当屋さんの仕事が減って、会社をやめなければならなくなつた。8か月、就労継続B型で頑張って、その後、就労継続A型に就職できた（知的障害、29歳）。

「仕事量の増加」：与えられる仕事の量がたくさんあって、精神的につらくなっている（視覚障害、25歳）。

「不安・悲しみ等の感情の出現」：次、また震災があったらと思うといつも不安です（肢体不自由、30歳）。

「人生観・価値観の表出」：私は電力会社に勤務しています。「原子力部」に所属していることもあり、「大震災」以降の仕事がかなり忙しく、ストレスもかなりありました。しかし震災にあわれて、すべてを失われた方々のやりきれない思い…考えさせられると同時に電力会社に勤務するものの使命「失われた信頼を回復」するために社員一同、日々夜遅くまでがんばっている仲間達。そして自分の社員としてのあり方を深く考えさせられた出来事でした。今後もさらに社員として自分の役割の上で努力をしていかなければと思っています（肢体不自由、55歳）。

「防災に関すること」：自分が避難する場所を確認すること。災害備品を持っておくこと。それ以外に大事なことを知っておくこと（知的障害、31歳）。

「ボランティア・募金等の被災地支援」：毎日義援金を職場で集めている。もう少しで総額100万円を被災地へ送金できる（精神障害、31歳）。

「原発に関すること」：原発事故により親族が海外に避難してしまい、連絡がとれない。原発事故により外での活動が減った→体力減たいにつながっている。原発事故により、精神（ストレス）が不安定。原発事故により、冷暖房をひかえている（電力の値上）（内部障害、50歳）。

「特に影響はなかった」：西日本のため、直接的な被害はない（肢体不自由、23歳）。

（2）新型コロナウイルス感染症拡大の影響について

「変化があった」と回答した者429人のうち、具体的な内容を自由記述で回答した者は368人（2021年度に実施した調査では170人、2022年度に実施した調査では198人）であった。回答を分類した結果、「感染防止・感染対策に関するここと」「日常生活への影響」「仕事への影響」「体調や精神面への影響」「コミュニケーションへの影響」に分類された。以下、分類別に自由記述の例を示す。

「感染防止・感染対策に関するここと」：コロナ前は、気にしていなかった基本的な生活（うがい、手洗い、マスク着用、外出、外食）を気にするようになった。すごく敏感になり神経質に生活するようになった（精神障害、52歳）。

「日常生活への影響」：友人関係…互いに時々あって励ましあっていたが、会うことができずつらい。日常…最低限の外出を心掛けるため、これまで以上に運動不足になった（視覚障害、57歳）。

「仕事への影響」：収入は、1/3に減り、家族の感染、予防接種後など、休む日も増えた。自分の収入だけで生活は困難になってしまいました（視覚障害、44歳）。

「体調や精神面への影響」：前職（R4年3月31日退職）では、完全リモートワークになり、気軽に質問もできず独

りで黙々と仕事をすることに、不安を覚えた。そしてうつになった（精神障害、53歳）。

「コミュニケーションへの影響」：毎日マスク生活で、会話する時、普通のマスクだと読み取れなく、透明マスクにかえてくれて、会話が読み取れるようになりました（聴覚障害、39歳）。

4 考察

大規模自然災害である東日本大震災と、感染症のパンデミックであるコロナ禍は一見すると異質な状況に思えるが、障害のある労働者に与えた影響には共通要素が認められた。具体的には、生活場面と職業生活にわたる危機的状況や制限等による急激な社会環境や労働環境の変化への適応プロセスでの困難状況、経済活動の全般的停滞による失業や収入への影響、心理的ストレスや健康状態への影響がそれである。

一点目の「変化への適応プロセスでの困難状況」について、震災では、親しい人の喪失、避難、安否確認、職場待機・帰宅困難、ライフラインの寸断等が、コロナ禍では感染の恐怖や社会的孤立、社会的つながりの減少等の日常生活環境の大きな変化、特にコロナ禍では在宅勤務や新しい生活様式への適応等の職場環境の大きな変化があった。社会全体での緊急事態への対応が進められる中で、障害があるが故の社会的不利益を被らないようにすることを十分意識することの重要性が改めて明確になった。

二点目の「経済活動の停滞による影響」について、東日本大震災ではインフラの破壊やサプライチェーンの停滞が、コロナ禍では外出自粛や新しい生活様式の要請が、それぞれ経済活動に大きな影響を与え、失業したり、収入が減少したりした労働者も見受けられた。その一方で、医療機関など仕事量が増加する業界もあり、ニーズの多様性を踏まえた、きめ細かな障害者就労支援の必要性が明確になった。

三点目の「心理的ストレスや健康状態への影響」について、両方の災害により、多くの人々が強いストレスや不安を感じ、メンタルヘルスに悪影響を及ぼしていたことが明らかになった。また、震災後の避難生活やコロナ禍の運動不足により、健康状態が悪化する人がいた。障害者は特に、身体的や精神的に障害を抱えていることを留意し、心理、健康面への対策を講ずる必要があることが明確になった。

【引用文献】

障害者職業総合センター（2025）障害のある労働者の職業サイクルに関する調査研究（第8期 調査最終期）－第8回職業生活前期調査（令和4年度）・第8回職業生活後期調査（令和5年度）－. 調査研究報告書No. 181